

マーク・トウェインのエンディング効果 (2)

——『アーサー王宮廷のヤンキー』における——

浅山 龍一

〈その1〉 トウェインの「フレーム」への固執

〔1〕 ふたたび『ハック・フィン』の「フレーム」

ユーモア作品を中心に南部文学の“視点”の変遷を追う K. Lynn¹⁾は、初期の南部ものの特徴に、Addison の影響と思われる、framework (以下「フレーム」) があり、いつも品位を保ち、泰然自若とした作者(観察者)が、原地の粗野な荒くれ男たちを克明にまた滑稽に描写し紹介(まるで見せ物?)しながら、自分は最後に「こんな事では困ります」と genteel に“教訓”を述べて読者の好感をかう、といったストーリー・パターンのあることを指摘した。これを Gentleman 視点と呼んだ。ところが、南部の主人公たちは次第に“土俗的”(ときに“超人的”)荒々しさを発揮するようになり、また驚くほどセンチメンタルになることもあって——更には“人生”について述べるなど——観察者を“圧倒”してしまふようになる。Clown 視点の登場である。作者は啞然としてしまつて“教訓”を述べる気力もないので、「フレーム」は役目を果たさなくなり、だらしなく残る。

この“視点”変遷はトウェイン文学においてひとつの仕上がりを見る。Clown 自身が観察者になって“視点”を奪う、そして彼(リポーター)自らがヘマをやっては自分を揶揄し、読者の「笑い」を誘うという Innocent 視点の登場である。Lynn はトウェインの *Innocents Abroad* (1869) と *Roughing It* (1872) にその視点の現われを見、*Huckleberry Finn* (1884) においてその完成を認める。——しかしながら、エンディングの bravado だけは理解できないという²⁾。

トウェイン研究の大御所である H. N. Smith も、多くの批評家を代表して³⁾、『ハック・フィン』をアメリカ文学における Initiation Story (成長物語) の「完成品」だと認めながらも、「『シャーバン大佐エピソード』と『最後の』トム・ソーヤーの箇所はキズ (flaws) である」⁴⁾と付け加える。

しかし、これらの“問題”箇所にも、ひょっとして何かトウェイン独特の意図がこめられているのではないだろうか。

Ch. 21—22 で、逃亡中のハックはある光景に出会う。町の名うての放浪者 Boggs 爺が、酔っ払って射撃の名手シャーバン大佐に挑戦するのである。シャーバンは非情にも Boggs を一撃で撃ち殺す。町はザワつくが、中にはその場面をまねてもう一度演じてみせるのもいる。それに拍手を送るのもいる (マゾヒズム)。だが、そのうち、報復のために群衆が集まってくる (サディズム)。シャーバンは屋根の上にあがって逆に挑戦する。「お前たちは1人じゃ来れないのだ。お前たちは弱虫の集まりなのだ。大勢で、それも暗がりではなければ何もできない。南部のリンチはみんなそうだ。南部ってところは……(中略)……。人数を当てにした、借り物の強がりはやせ。とっととうせろ！」といった激しい「演説」が行われる (サディズム)。聞いていた群衆は下を向いてしまい、何とすごすごと退散する (マゾヒズム) のだ。ただ Boggs の娘だけが父親にもたれて泣いている。ハックもこの模様を陰から見ていたのだが、何をすべもなく、サーカスを見にゆく。(傍点=筆者)——人間のもつサド・マゾヒズムが端的に描かれたエピソードである。何もせず、ただサーカスを見にゆくハックも結局はそれらの一部でしかない。後味の悪い話である。

この「シャーバン大佐エピソード」と、そして Ch. 32—43 (エンディング) に長々と描かれる、トムによる「ジム救出」のための嗜好をこらした“仕掛け”(悪ふざけ、サディズム)——これについては前回論文で詳しく論じたので省略する⁵⁾——は確かに、南部の田舎少年ハックが父親の迫害から逃げ出し、岸辺の大人社会を“批判”と“戸惑い”の目で観察しながら川を下る、そして出会った黒んぼ (nigger) ジムと助け合って「自然」を学び、「生き方」を学び、ついには南部道徳(「良心」)との激しい「葛藤」の末、「神」を捨ててもジム

を逃がしてやろう（奴隷解放）とする Initiation Story（成長物語）とは相容れないものである。どちらの場合も、主人公であるはずのハックはただ啞然として、為すすべもなく成り行きを見守っている（主人公の“存在感”がない）。どちらの場合もストーリーはあっけなく終わってしまうのである。

ここにあるテクニクとメッセージは何であろうか。

批評家たちがこぞって批難するこの irresponsible なストーリー展開， detached なストーリー・エンディングに，筆者は逆にトウェインの“仕掛け”を感じる。——トウェインは，ストーリーに“超越”した感じ（視点）を与える南部伝統の「フレーム」を捨てずに，むしろエンディングにおいてわざと利用（応用）したのではないか。そしてストーリーが「モラル」を問題として展開されているような場合，このような“視点変更”による“無責任”な終わり方は，見事に読者の（感情移入していた）気持ちを裏切り，読者に思わず“自嘲”の「笑み」を浮かばせる。それは人生の「不条理」とその「滑稽さ」というものを伝えるサディスティックな「ブラック・ユーモア」である。トウェインの作品の狙いがあらゆる形の「滑稽」であり，とくに人生における「不条理」（absurdity）であった（トウェインのエッセイ *How To Tell a Story* 参照）とすると，彼のこういったエンディング・テクニクは見事にその目的を果たしたといえよう。

〔2〕『ハック』以後，『ヤンキー』まで

Huck Finn (1884) 完成の直後，トウェインはすぐ *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1884-1889)（以下，『ヤンキー』）に取りかかる。そして完成までの5年間に出版するのが，トウェインによるアメリカン・ユーモア集大成 *Mark Twain's Library of Humor* (1888) ——ここにはさまざまなユーモリストによる145本のユーモア作品が収められ，そのうちトウェイン自身のものは20本である——と，その他散見される短編6本である。

前者のトウェイン作品のうち9本が⁶⁾，そして後者のうち1本⁷⁾が「フレーム」構造をとっている。つまり，この時期の作品26本中11本まで，トウェイン

は“よそよそしい” エンディングを選んだのである。 *Library of Humor* 中のトウェイン作品はすべて『ハック』以前に発表されたものばかりであるが、しかし『跳び蛙』を始めとして、彼が後々まで愛好した話ばかりであり、それらにおける「フレーム」への執着は、かえって、直前に出版された『ハック』の「フレーム」的解釈の正しさと、直後に出版される『ヤンキー』に対する（これから述べる）「フレーム」的解釈の正しさを保証するだけである。

Cannibalism in the Cars（最初の発表は1868年）を見てみよう。

「最近、私はセント・ルイスに行き、帰りにインディアナ州のテレ・ホート駅で乗り換えた後、ある小駅で坐っていた。そのうち、にこやかな顔の老紳士が現われて脇に坐り、1時間ほどあれやこれやの話をした。とても政治に詳しくて知的な人物だと思われた」とストーリーは始まる。しばらくして2人の男が通りかかり、「ハリス、それはいいね」などという会話が聞こえてくる。その時である、その老紳士の目がキラリと輝き、何かを思い出したようなのである。彼は私の方にふり向いて「あもう、聞いてもらいたい話があるんですが…。私の人生の秘密なんです…。聞いてくれますか。それでは途中で口をはさまないで下さい」と思いつめた様子でいう。「私」が約束すると、彼は話を始める。——『跳び蛙』とよく似た出だし（詳しくは前回論文）で、観察者である「私」の Gentleman 視点で書かれている。男は夢中になって話をし、「私」は“圧倒”されて聴いている。Clown 視点に入っていく。「ある年の12月のことなんです。私は列車でセント・ルイスからシカゴに向かっていました。乗客は男ばかりで、皆そのうち親しくなりましたね。あれやこれや話していました…。まさかこんな恐ろしいことが待っているとは思いませんから。」——トウェインの“間”のとり方は絶妙である。 *How To Tell a Story* に述べる通りに。

夜になって雪が降り始める。人家らしきものはとっくに消えている。大平原の雪である。それはいつしか吹雪に変わり、線路に積もっていく。列車の動きが鈍くなる。「乗客たちの顔に“不安”が現われてきました…。そしてその通りになりました。」午前2時。とうとう大平原に取り残されたのである。

乗客たちの除雪作業をよそに、嵐はますます激しくなる。除雪より積雪の方が多い！「列車は故障——のアナウンスに客たちはただシンとしてしまいました。」灯も薄くなる。朝が来ても雪は天まで覆っている。「空腹」が襲ってくる。そのため、寝てもすぐ目が醒める。5日目、皆の目に「飢え」が宿っている。7日目、「死」が近いことを知る。

その時である。皆が「来る」と思っていた恐ろしい瞬間がやってくる。ひとりの紳士が突然立ち上がっていう。「諸君、もうこれ以上我慢はできません。誰かが食物を提供しなければなりません。」次々に手が挙がり、意見が発表される。「私は Sawyer 神父を推薦します」（サディズムの始まり。いきなり「神父」とはトウェインらしい、ブラック・ユーモア）「いや、私は Slote 氏を推薦します」「いや、私は辞退します。むしろ Nostrand 氏を推薦します」等々。——ひっきりなしに「推薦」と「辞退」が続いてゆく。この Clown 視点の idiotic なストーリーの進め方は、アメリカの他のユーモリストには真似のできないトウェインの“お家芸”である。彼自身、そういうように (*How To Tell a Story*)。

埒が明かないので、乗客たちは「議長」を互選し、そして「候補者」を決めるために「委員会」を発足させる。「委員会」案を「議会」(“House”!) に報告させ、更に意見を述べ合って「投票」に移るのだ。——トウェインらしい、ひどい(国会の)バーレスクである。

意見の陳述がある。「私は〔委員会推薦の〕Herman 氏には反対です。彼は人格的には申し分ありませんが、痩せ過ぎていて栄養がありません。むしろ、Harris 氏を推薦します」「私は〔同じく委員会推薦の〕Messick 氏よりは Davis 氏がよいと思います。Davis 氏は開拓作業のため肉が硬くなっていますが、量はあると思います」「今の意見に反対です。Davis 氏は年がいており、骨が重いだけで、肉は余り無いのです。まわりの人たちをみて下さい。この飢えた時に、肉よりスープを要求する者は誰もいません」(拍手)——何と eccentric な話の展開か。読者には皮肉なサド(発表者)・マゾ(拍手をする者)ヒズムの持たらす“滑稽”快感が伝わってくる。まさにブラック・ユーモ

アである。

ついに「投票」が始まり、「当選者」が発表される。「夕食に Harris 氏。明日の朝食は Messick 氏…。」Ferguson 氏を推していた友人たちが「遺憾」表明をする。「投票のやり直しを要求します」等々。——トウェインがバーレスクをやると、止まるところ知らずである。

しかし、そのうち、Harris 氏の「準備」ができる。Cannibalism の始まりである。「もう少し味付けよくできたとは思いますが、私はとても美味しいと思いました。翌日の Messick 氏も少し臭いはありましたがよかったです。でも栄養と味を考えれば何ととっても Harris 氏でした。その日の夕食は Walker 氏。少しレアーでした。次は…。」——サディスティックな世界が淡々と（“達観”した）ユーモアタッチで描かれ、読者はこわくなる。

そうやって毎日が送られるうち、やっと「救援」が駆けつけてくる。「Murphy 氏の番だったのですが、彼は生き残りました…。おかげで故郷に帰って、そして Harris 夫人と結婚しました。すばらしいロマンスでしたよ。ふたりは今も幸せにやっています。廻りの人たちからも尊敬と祝福をうけながら…。」——何ともいえないひどいユーモアに、読者は思わず、sardonic な「笑み」を浮かべる。

男が「私」（トウェイン）の方を向き、「それにしても、あなたはハリス氏に似て感じがいい方ですね」といって目をキラリと輝かせた時には「私」も震えあがる。しかし、「ああ、もう時間です。私はこれで失礼します」と男は去ってくれる。「私」がたとえようもなく困惑し、どうしてよいかためらっていると、車掌がやってきて話をしてくれる。

「ああ、今の男ですか。かつて雪で列車の中に閉じこめられたことがありましてね。それ以来、おかしくなったんですよ。時おり、人をつかまえては“人食い”の話をするんですよ。時間があれば、乗客全員を食べるところまで話すんですよ。余り気にしないで下さい。」「私」は間違いを相手にしていたことがかり、ほっと胸をなでおろす。——何と violent なエンディングであろうか。ドキドキしながらついてきた読者は、最後の1パラグラフで欺かれ、いきな

り、車掌と「私」の正常な Gentleman 世界に引き戻される。

しかし、これがトウェイン独特のストーリー展開である。『跳び蛙』を始め、11本の物語がすべて似たパターンを持っている。つまり、おちついた Gentleman 視点で始まり、異常な Clown 視点になって、そしてまた Gentleman 視点にもどってくる。本来、読者に“安心感”を与えるための「フレーム」形式であり、実際、今回の話などでは、ある意味で読者をほっとさせてくれる。しかし、ストーリー中の Clown 部分が、(今の話でもそうであったが)人間の“モラル”を扱っていたり、感情的な(読者の感情移入を要求する)ものであれば、「フレーム」的エンディングは別の効果をもつであろう(Lynn はそこまでは考えなかった)。そう、そのよそよそしい、“超越”した終り方のために、すべてのそれまでの真面目なものを“コメディ”扱いしてしまふ、サディスティックなユーモア作品となる。

以上、*Cannibalism* を分析したが、『ハック』から『ヤンキー』に到るこの時期に、トウェインが26作品中11本に同じパターンを応用したということは、彼が相変わらず、「フレーム」にこだわっていることをよく示していると思う。

〔3〕 この頃のエッセイなど

2つ目に気づく点はこの頃のトウェインの“思想性”である。先にあげた新作短編6本のうち3本はエッセイでもあり、彼の思想性をとくによく表わしていると思われるので見ておきたい。

まず、*Three Statements of the Eighties* (1880-85?)⁸⁾ と後に題された小篇であるが、これは『聖書』批判のかたまりである。

「私は神の存在を信ずる。神の goodness と justice と mercy が、私のような創造物の中にも現われることは認める」といいながら、「しかし、神が誰かにメッセージを託したとか、姿を現わしたとかいうのは嘘であり、旧約にしても新約にしても『聖書』は人間が作り出した(嘘の)作品である」と話を展開する。「宇宙には、病気になる者がいたり、ならない者がいたりという法(laws)のようなものはあるが、神はそんな小さなことには頓着しない」「“モ

ラル”なんていうのは人間の間で自然発生的にできるもので、神がわざわざ天から教えに来たりはしない。私が“モラル”を破っても、地球に泥をぶつけても、神は気にとめていない。人間がルールを破って困るのは人間たちである。従って神による“罰”も存在しない」というのだ。ついには、「“世の終り”が来ても私は気にしない。その時には私は死んでいないのだから関係ない」といい切る。

これはまるでハックの「葛籐」部分（第31章）の再現である。『ハック・フィン』は、「よし、こうなったら〔神様を捨てて〕地獄におちてやれ」というハック少年の独白で“最高潮”に達するのであった。そしてその後の例の horse-play へと進んでいった。

エッセイの方は、『聖書』の〔人間への要求の多い〕堅くて中世的部分は、将来、重荷になるから、今のうちに削除すべきである。『簡約聖書』(An Expurgated Bible)というのがよい」となる。「非常識」で「非人間的」部分が多すぎるといふ。「いう通り」——「十戒」や「山上の垂訓」のことをいっているとされる——には生きていけないと。

だからトウェインは、こんな「不合理」な『聖書』は「全智全能」の神が書いたはずがない、またちょっと「有能」な人間が書いたはずもないという。彼は、『『汝ら、不義を行ななかれ』』とっておいて、自らヨゼフの婚約者であったマリアを犯すなんてこと自体おかしい。——最も低能な作家でもそんなへまなストーリーを書くはずがない』『『救いの門と道は狭く、到れる者は少なし』』とっておいて、『『汝ら、産めよ殖やせよ』』はないだろう。地獄の炎の燃料になる人間を殖やせというのか」と激しく噛みつく。トウェインの「キリスト教不信」に代わる哲学は“サディズム”のようである。彼のみる人生のサディスティックな様相——その「不条理」——を表わすのに効果的な「フレーム」に彼が執着するのは納得がいく。

The Character of Man (1885)⁹⁾ は今度は「人間」自体に対する憤りである。

「人間はたぶん“意図があって”(intentionally) 神に創られたわけでない」

と始まるエッセイは皮肉に満ちている。「養殖場のカキが人間にまで進化してしまったことには、神自身、“驚き”と“後悔”の念でいっばいだらう。——こんなひどい (detestable) 生き物を地上にはびこらせて」という。

「人間だけが“悪意”(malice)をもっている。人間だけが“わかって(knowing)いて”他人を苦しめる。人間だけが“楽しんで”(for fun)人を殺し、“報復のために”(for revenge)殺す」と述べる時、読者はハックが批難し、また恥ずかしく思った「大人社会」(そしてその影響を受けてすぐ真似する「子供社会」)のことを思う。『ハック・フィン』はまさにこの(大人も子供も含まれた)人間のもつサド・マゾヒズムを暴露し批判したのではなかったか。

「人間はその点で、鼠よりも、いも虫(grubs)よりも、旋毛虫(trichinæ)よりも劣る」迷惑な存在だという。人間には「自立心」などなく、「奴隷」根性を持ち、「弱虫」で「嘘つき」だ、神から与えられた「モラル」が総ての人間に備わっているのも嘘だ、という。そしてニューイングランドに起こったある政治事件を挙げながら、「人間なんて大人しい“羊”と変わらない。まわりの様子を伺いながら、結局は^{たいせい}大勢についていく」「たまたま勇気ある人間が出ることがあるが、その1人が生まれるまでに40年はかかる」という。「政治家の悪口を言っている、翌年は彼の前にひざまづいて崇めている。応援演説だってする」「“自由”“独立”なんてのは我々の親も教会もいつも口にしていた。そうして黒人を弁護するわずかな者たちを『聖書』を使って説教し、こん棒で殴っていた」と述べ、「人間は自分と自分の家族以外は愛さない——エゴのかたまりである」と断言して終わる。

人間のサディズム(「政治」「教会」とマゾヒズム(「大人しい羊」「応援演説」)を鋭く指摘しているエッセイである。読者は「シャーバン大佐」の演説を思い出す。そして King と Duke の手のこんだ“詐欺”場面を思い起こすに違いない。トウエインの思想は一貫している。

そしてこれらのエッセイを考え合わせても、『ハック』のエンディングはトウエインがまさに“意図的”にやったこと、それによって人間世界の「不条理」を描き出そうとしたことは裏付けられるし、直後の『ヤンキー』にも同じ

傾向が表われてくることは予測してよい。

この時期にトウェインが行ったスピーチも人前を畏れぬ大胆なものばかりである（これは C. Neider が収集している）¹⁰⁾。「生と死の両方をくれた最初の人間アダムに乾杯」（1880-85? あるパーティーで）、「大きい戦争（南北戦争）だけ記録が残されて、その当初にあった私のやった小さな戦争が無視されているのは遺憾だ。私だって兵士として、たった1人しかいなかった敵と必死で戦い、殺したし、略奪だってちゃんとやったんだ」（1887、メリーランド州の北軍同窓会で）等々。

〈その2〉『アーサー王宮廷のヤンキー』について

〔1〕 ストーリー展開

前章に述べたような思想的、テクニクの背景を持ちながらトウェインはこの時期（1884-1889）『ヤンキー』を書き進めていたわけである。

Howells が「トウェイン作品中、最高の出来栄え (highest development)」¹¹⁾ とほめ上げ、当時の文芸批評家たち、更には労働組合までが「ideology 的に好ましい」¹²⁾ と激賞した作品である。——それは、体裁は「中世のイギリス」をバーレスク的に揶揄したものであるが、返す刀で当時のアメリカ「産業革命」（いわゆる “gilded age”）の持つ、“機械”優先の“非人間性”をも浮かび上がらせており、皮肉にも社会主義者たちを狂喜させたのであった。トウェイン自身は“教会不信”“人間不信”は強いが、Baetzhold も述べるように¹³⁾、むしろ「投機的」であって社会主義者ではなかったのであるが。

しかし、イギリス人にとって、何はともあれ伝説的「名君」と謳われたアーサー王とその「義侠」的騎士たち、そして「英雄」ランスロット卿の「ロマンス」からなる、いわゆる『アーサー王物語』¹⁴⁾を、いかに合理的視点からといえ、揶揄されることは堪えがたいことであり、本来トウェインを愛好していた批評家たち(Lang や Kipling, そしてアメリカの Paine まで)¹⁵⁾も、彼の indecency を責め、更にはイギリスでの「出版拒否」運動も¹⁶⁾起こったほどであった。だが、トウェインが揶揄したイギリス中世の“非合理性”は、実際、

(中世) 当時の問題だけでなく、イギリスのまさに「今日の問題」でもあり、多くのイギリス人はトウェインを歓迎している、と指摘するのは Stead¹⁷⁾であった。

また J. Williams¹⁸⁾は、トウェインがこの作品を書くにあたって、Lecky, Lingard, Trumbell, Ferneron, Saint Simon, Taine, Carlyle, Standring といった歴史家たちの資料をもとにイマジネーションを膨らませていったことを立証していった。『ヤンキー』の指摘するような数々の事件と類似したものが「中世」においては実際存在していたのである。ただし、中世といっても「6世紀」のアーサー王の時代がそのように「腐敗」していたかどうかは(マロニーの『アーサー王物語』から推測しても)疑問の残る所であり、トウェイン自身「前書き」の中で「[単なる想像であって] 当時そうだったとは限らない」と断わることになる。

さて、ストーリーはイギリス旅行をした「私」(トウェイン)がある古ぼけた城を見学している時に「妙な男」に出会う所から始まる。この dreamy な男は2度までトウェインの所に現われ、「あなたは[靈魂の転位の他に]時代の転位ということを知っていますか——それから肉体の転位ということも?」¹⁹⁾ といって彼の奇妙な体験を語り始める。彼はハंक・モーガンといって、コネチカットのあるコルト銃工場の機械工なのであるが、あるとき部下とのトラブルがあって頭をひどく殴られた。気がつくとなんと「6世紀」のイギリスに居た、というのである。その時の模様はここにまとめてある日誌を読んでもらえないか、と古ぼけた原稿の束を見せる。よく見ると、「再生紙」に(下地には何やらラテン語らしきものがある)書かれており、その字も年月が経ってだいぶ薄くなっている。

そしてこの「原稿」がそのまま紹介されるというパターンである。『ハंक・モーガンのイギリス中世への冒険』とでもいえようか。(これは「タイムマシン」的物語である。H. G. Wells の作品(1895)よりも早い、世界最初の「タイムマシン」発想だと思われる)²⁰⁾ここでは「私」は完全にストーリーから追い出され、ただ驚いてモーガンの世界を見ている。——Gentleman 視点

→Clown 視点と移る、Lynn のいう典型的「フレーム」構造である。読者は Clown に感情移入して引きずり廻され、そして最後（エンディング）に Gentleman の所に帰されることになる。

とにかく『冒険』を追ってみよう。

何も知らず、(6世紀の)イギリスに現れたモーガンは目の前に立っている「馬に乗った奴 (fellow)」に驚く。絵の中から出てきたような奴で、頭のとっぺんから足の先まで鉄の甲冑をかぶっていて槍と剣をもっている。馬も甲冑をつけていてはでな赤と緑の絹を掛ぶとんのようにして体を包んでいる（——「騎士」の登場である）。何やらよくわからない言葉で話しかけてくるのでモーガンは「さっさとサーカス小屋に帰んな。さもないと親方に言いつけてやるぞ」という。——状況観察のし方といい、practical でウィットに富む^{せりふ}台詞といい、モーガンは少し大きくなった「トム」のようである。

相手がいきなり突進してくるので「これは本気だ (he meant business)」と思い、急いで逃げて木によじ登る。相手は「お前はもうわしの所有物だ」というし、向うの方が有利 (the bulk of the advantage) そうだったので、「こりゃあ、機嫌をとった方が (humor him) よさそうだ」と決めて、言いなりになる。——この視点は innocent でびくびく震えながら社会を観察していた「ハック」というよりは、負けず嫌いで絶えず虎視眈々と“チャンス”を狙っている「トム」であろう。“語い”も“口調”も「トム」のものだ（第一、「ハック」にウィットは飛ばせない）。そして読者はこの『ハック・モーガンの冒険』が、たとえ『ハック・フィン』の直後の作品であっても、実は新たな『トム・ソーヤーの冒険』であり、『ハック・フィン』中の「トム」もそうであったように、ここでも「トム」主導の“愉快”で“危険”で“無責任”な物語の展開を既に期待しているのである。

キャメロット（アーサー王の拠点地）の町を通過して「保護施設 (asylum)」のような所に連れていかれたモーガンは、居合わせた少年（クラレンス）から今が「513年」であり、そこが「アーサー王宮廷」であると聞かされ、2度びっくりする。嘘か本当かしばらく悩むが、「すると俺の仲間にはもう会えない

のか。——連中はあと1300年たたなきゃ生まれてこないのだから」とウィットを飛ばすのはさすが（トム）である。そして「ええい、もし今がやはり19世紀で、自分が気違いの間において逃げられないのならこの病院のボスにでもなってやる。逆にもし本当に6世紀ならこれは面白い、3カ月以内にこの国のボスになってやる。俺はこの国の1番頭のいい奴より1300年は余計に智恵があるのだから」と決心をする。そしていう。「いったん決心したら私は時間を無駄にする人間ではない。」——この“英雄”気取りと“即断即行性”は伝統的「トム・ソーヤー」である。読者は抜け目ないトムの「ペンキ塗り」エピソード、そして彼が結成した「トム・ソーヤー・ギャング団」その他のことを思い出すであろう。

しかし、「ハック」的などころも出てくる。「騎士」たちの様子をモーガンは次のようにレポートする。

「だいたいにおいてここの人々の言葉使いや態度は上品で優雅だった。なかなかの聴き手でもあって、誰かがしゃべっている時は——犬が喧嘩でもしていなければ——まじめに人の話を聴いていた。もうひとつわかったことは、彼らが子供っぽくて無邪気だということだ。これ以上に大きな嘘はないというような嘘っぱちを、じつに愛嬌のある天真らんまんな口調で話し、聴くほうも喜んで聴いて、しかも頭から信用している。だからこういう連中と残忍で空恐ろしい行為を結びつけて考えることは、まずむずかしいのだ。しかし連中は流血と苦しみのお話をいとも無邪気に語るのだ。おかげでこっちも身震いするのを忘れてしまいそうになったりした。」——騎士たちの大言壮語のうぬぼれ（トール・テール？）に対する、この“控え目”で“批判的”な観察視点はまるで「ハック」である。また、騎士が他の騎士にいたずらする practical joke に対して「大人げない」と思うのも生真面目な「ハック」的だし、時おりイギリスの田園風景をながめてうっとりしているモーガンも「ハック」的といえる。

しかし、これらは行動的（投機的）モーガンの性向の中では目立たない。トム＝モーガンの中に在る（残る）「ハック」性とでもいべきものであろう。読者は逆に、ハック少年の場合は、成長期の彼の中に「トム」的な“残酷さ”

“ふざけ”が見え隠れしていたことを思い出す。1人の人間の中に「トム」性と「ハック」性が同居していてもよいと思われる。程度の差こそあれ。

第4章辺りからストーリーの雰囲気が変わる。これは H. N. Smith や Cox,そして Baetzhold の指摘する通りである。

「円卓の騎士」(騎士の中の騎士であり、アーサー王の近臣の集まり)のひとりであるケイ卿が、「恐ろしい大怪物」モーガンを「遠い未開の地」でしとめるまでの「苦勞」と「大冒険」——ひどい嘘っぱち——を長々と「演説」したあとで、「なお、この化け物は21日の正午に処刑される予定」と事も無げに、それも欠伸まじりに宣言してしまう(傍点=筆者)。——『ハック』の大きなテーマであった(と筆者は見る)人生の“サディズム”が、早々と『ヤンキー』の中に顔を出し、モーガンを襲ってきた。そしてこれはストーリーの流れを“陰鬱”なものに変えずにはいないのである。

モーガンは有難いことに、この513年の今月21日に「皆既日食」があったことを思い出す(ひどくできすぎた「ジョーク」的ストーリー展開はトウェインの得意とするところ)。「しめた」と思ったボスはクラレンス少年を呼んで、「効果」を考えながら、「1分間の恐ろしい沈黙 (awful silence)」のあと、「最後の審判を下すかのような (charged with doom)」声で、「劇的にだんだんと調子を高めて最高潮に」もっていきながら、「荘嚴に崇高に (sublime and noble)」言っただけ。「帰りて王に伝えよ。その時刻にわしは全世界を覆いつくし真夜中の真暗やみにしてみせよう。太陽をかき消して……それは2度と輝きいずることはないだろう。地上の果実は光と熱を失って腐りはてるだろう。人間は飢えて死ぬであろう、最後の1人に到るまで！」少年はぶっ倒れて気絶し、外の番兵に運び出される。——人生のサディズムに対し、ストーリーの「ジョーク」的展開(これ自体、サディスティック)や主人公のより大きなサディズムで切り返すのは代表的トウェイン・パターンである。“善人”と思われていた人間(モーガン)がすぐその「シャーバン」的サディスト性を暴露してしまった。

少年はモーガンの「魔力」の秘密を知った喜びの余り、得意気にアーサー王

に伝言する。そして胆を潰した王に対し、“優越感”をもって、「1日刑を早めればいいんですよ」と智恵を出してやる。——これまた、ひどい「ジョーク」である。あどけない小間使いの少年の“見栄”のひと言がアーサーを救い、モーガンを再び奈落の底につきおとす。人生のサディズムが又しても顔を見せた。

予定を変更されて処刑台に連れ出されたモーガンは大あわてである。4000人の群衆に囲まれ、彼らの目にも「恐怖」が浮かんでいる。モーガンは「死」の瞬間を覚悟して待っている。……するとその時、空が暗くなってくる。「日食」が始まったのだ！少年は「日付」を間違えていて今日が21日だったのである(再びひどい「ジョーク」展開)。トム＝モーガンはこの瞬間を逃しはしない。彼は最大の“演出”をやったのける。「生気が私の血管の中でわき返り始めた。私にはわかっていた。彼らの目はきっと次の瞬間わたしに向けられるはずだと。私のほうの用意はちゃんとできていた。これまで演じたこともないほどのじつにもったいぶった恰好で、片方の手をぐっと伸ばし、太陽を指さしていたのだ。それはみごとな効果だった。戦慄が波のように群衆の上を走ってゆくのが見えたほどだ。」——この“勝ち誇った”ようすに、読者は「モーガンが救われてよかった」という感情を超えて、彼の中のもはや疑いようのない、何か“威圧”的なもの、“不気味”なものゝ現われ(サディズム)を感じとる。“視点”も確かに変わってしまっている。「ハック」性の消えた、明瞭な Clown 視点である。*Cannibalism* と同じ視点である。

とにかくモーガンは赦され、そればかりか、迷信深い王朝にあって、彼は「参謀」として登用される。「ボス」と呼ばれるようになる。——そして、ボスという名には *dictator* の響きがある。

このあと第26章に至るまで20章110頁(全体の約2分の1)にわたって、ボス主導の「国内改革」が描かれる。そこではボスは“英雄”よろしく(「権威ってのは悪くないものだ」)王国内の「迷信」(奇跡や魔術信仰)を廃し、「騎士制度」(ひんばんな馬上試合、腕だめしの「冒険」,「聖杯探求」の長旅)の無駄を見直す。「封建」領主たちの横暴による無実の囚人たちを救い出し(中には『モンテ・クリスト伯』を思わせる囚人も出てくる)、全ての頂点にたつカ

トリック「教会」の傲慢さを暴き、批難する。(その調子は *Three Statements* と殆ど変わらない！)

それらに代わって新聞、特許制度、公平税制、電信電話、自由広告、学校、工場、そして(いざという時のための秘密の)軍隊(サディズム!)が組織される。そしてボスの頭の中には「奴隷解放」の必要性(アメリカへのパーレスク?)が考えられている。——「6世紀」に「現代文明」を持ちこもうというのだ。

これらの改革に戸惑い、抵抗する、無知な支配者たちとそれ以上に無知な民衆のあわてふためく姿——そのサド・マゾヒズムのひどさ——が次々と“滑稽”に描き出される。まるで *The Character of Man* の世界を引き伸ばしたようである。そして“精力的”に「計画」を断行してゆくボスは、『ハック』の最後で10章50頁(全体の4分の1)にわたって自らの「計画」を“一途”に仕上げ、ゆくトム少年の生き写しに思われてくるのである。——『ハック』の中ではこのトムがストーリーの泥沼化の原因であった。

ボス自身のもつサディスト性が気になり始める。(トムもそうであったが)あちこちにボスの sarcasm が顔を出す。「権威ってのは悪くないものだ」「この(王国内の)連中は従順でまるでウサギ」「騎士の脳みそは小鳥ぐらい」「ブリトン(イギリス人)は皆、野蛮でインデアンと変わらない」「たで食う人間も好きずき(There is no accounting for human beings)」「無知な人間(ここでは王)はすぐ恩を忘れる。絶えず気を引くように工夫していかないと」「“奇跡”をやる場合は目立つことが大事。平日より“日曜”がよく、できるだけ“派手”にやっ、て、“入場料”もとった方が却って効果は上がる。“主賓”は立ててやること——面倒くさくてもこの方が得」等々。そこで「迷信」の権化であった魔術師の住む塔を、わざと「嵐の夜」にダイナマイトで吹き飛ばして人々を圧倒し(「1000エーカーにおよぶ群衆はひれ伏した」)、また詰まって水が出なくなった『聖なる谷』の泉を再び湧き出させる(実は、ちょっとした突貫工事で済んだのだが)ときには、「ギリシャ製花火」を「5色」配備し、「ラテン語の詠唱」もやらせた。そして大勢の群衆の見守る中、ボス自ら

大声で（誰も知らないドイツ語を組み合わせて作った）「呪文」を唱えるのであった。大成功。「それはすばらしい一夜であり、すてきな一夜だった。それに評判もよかった。私は嬉しさの余り、なかなか眠れなかった。」——この壮大な“演出”と最後の台詞はもう完全に「トム」である。このままいくと『ハック』と同じ“破局”が待っている。

第27章で“視点”が変わる。H. N. Smith も指摘するように、「まるで『ハック・フィン』の中間部分のよう」である²¹⁾。ここから始まる10章60頁の長い間（全体の4分の1）、ボスは“仕掛ける者”から“観察者”へ、そして“あざ笑う者”から“感動する者”に変わってしまっているのである。

ある日、ボスが「平民の生活を見ておきたい」と申し出ると、王も興奮して（all afire）、「自分も是非その冒険をやってみたい」といい出すのである。2人は平民の姿に変装して町の中に入ってゆく。——まるでトムの誘いにハックが乗ってきた、『ハック・フィンの冒険』の始まりのようである。（王は「ハック」的好奇心の持ち主である。）

しばらく行くと2人は生き物の気配もない小屋を見つける。家全体が朽ち果てて、「死の静けさ」が漂っている。しかし、戸が少し開いているので近づいて声をかけてみる。……しばらくして女が出てきて「お慈悲でござえます！もう何にも残ってはいねえです」と訴える。「領主」に物を全部とられ、「教会」からは「禁令」が出ているという。「それに恐ろしい病気にかかっているから入らないでくださいませ。」しかし王は既に中に入っている（王の逞しさ）。ボスが明りを入れると、女は「天然痘」であった！

ボスは驚いてすぐに王を外に出そうとするが王はびくともしない。「わたしはここに残る」という。「お前こそ出てゆくがよい。『教会』の禁令はわたしにはとどかぬ。だがお前の場合は危険じゃ。」——何も恐れぬ王の“威厳”にボスは気負される。仕方ないので一緒にいる。

小屋の奥に入ると寝たままの男がいる。死んでいるのだ。女は勝ち誇ったようにいう。「もう誰もあの人を傷つけられないし、蔑すむこともできねえです。あの方は今ごろ天国にいて幸せにしております。そうでなけりゃ、地

獄で満足しておりますだ。地獄でなら、修道院の院長さまも、主教さまもいねえでしょうから。」女は饒舌になっている……。その時、かすかな物音がして王が梯子のかかっている薄暗い所から降りてくる。王の胸には小さな娘がぐったりともたれかかっている。ひとりで「天然痘」の“死神”と最後の戦いをしているのだ。——「そこには最高の heroism があった」とボスは思う。王に対しては「泰然自若 (serenely brave) として偉大だった」と思う。

娘は母親に見守られながらこと切れる。そして王の目には涙が泉のように湧き出ている。——ボスは“生”の凄じさと、王の“威風”に打たれ呆然としている。その視点は「人生」を学ぶ「ハック」の目である。ボスに再び「ハック」性が現われてきた。その目で人生の“有りのまま”を見ようとしている。そして王の示す人間的“威厳”は、まるでハックにいろいろな“生き方”を教えたジムのそれではないか！確かに第27章から『ハック・フィン』が始まったことに読者は気づく。

この家族の遺体をあとにして歩いてゆくと、遠くの丘に「火」が見える。火事だ。そして暗やみの中で「ざわめき」を感じる。更にしばらくそちらに向かって歩いていく中、木の枝からぶら下がった男を見つける。「リンチ」である。さらに多くの吊り下がった人間たちを見つける。そして「ざわめき」は「怒号」だとわかる。王とボスは急いで茂みの中に隠れる。目の前では男も女も群衆に駆りたてられている。——『ハック』の中の“黒んぼ狩り”の、あるいは「グレンジャーフォード家とシェパードソン家の戦い」の再現のようである。

2人は少し離れた炭焼き小屋にたどり着いて泊めてもらい、そこの夫婦から事情をきき出す。「暴動」が起きて領主の家が襲われ火をつけられた。村の者が皆で助けにいったのだが、領主は死に、家族が助け出された。嫌疑がいろいろな人間にかけられた。そのうち領主派の人間が「その連中を皆殺しにしてしまえ」と号令をかけると、村人皆がそれに加わった。そして18人が虐殺された。(傍点=筆者)——ボスは「恐ろしいもの」を感じる。人間の中に潜むサド・マゾヒズムがその姿を現わしたのだ。

王が主人に、領主の所の囚人たちはどうなったかときく。「皆焼け死んだ

だ」と答える。「逃げ出した者もいるんじゃないか」と問いつめると、男は少し落ち着きを失う。あとでボスは彼をそっと外に連れ出して聞く。「あんたのいどこかい？」男は真っ青になる。ボスは「[その囚人のことを] 誰かに教えるつもりかい？……教えるんだったらお前さんは——大悪党だ (damned scoundrel) !」という。驚くべき発言に、男は思わず「救われた」ような顔をする。「お願いだ、もう一度今の言葉をいって下せえ！」ボスはいう。「口をつぐんでいればいいんだ。その囚人たちは正しいことをしたんだから。」男の顔には「恐れ」が消え、「感謝」が表われている。そして逆するように、「あんたがスパイでもこれが畏でも構やしない。今の言葉がもう一度きけるなら、おら喜んで絞首台にだってのぼるだ！」そして、とうとう、「ああ、ああ、おらも言いたいこと言わしてもらうだ。あんたが報告しても構やしねえ。おらあ、手をかしたんだ。領主さまが死んだんで皆大喜びだが、うわべは皆悲しそうにして涙をながしてるだ。その方が安全だからよ。さあ、おらも言ったぞ！こんな気持ちのいいことはない。さあ、連れてってくれ、絞首刑だって構うもんか。」——強烈な場面である。男は社会的「良心」を相手に“葛籐”し、乗り越えた！「モラル」に打ち勝った。ひとり立ちした……。呆気にとられながらもボスは“感動”をおさえられない。思わず、「ああ、人間はやはり人間なのだ」と口走る。

そしてこの場面は、まさに『ハック』のあの「葛籐」場面と重なり合うことに読者は気づくであろう。ハック少年が「モラル」の“壁”を乗り越えたように、ボスがこの1人の平民を通して彼と共に「モラル」の“壁”を越えた。——「トム」性の強いボス自身が“葛籐”するのは似合わない（トムは enterpriser であり、真面目なものを“茶化”してしまう）が、ボスの中の「ハック」的部分が、この「ハック」的男と“一体”になって“葛籐”し、乗り越えたのだ。これは『ハック』と同じく、『ヤンキー』中の名場面といえるのではないか。

さて、更に激しいサディズムが2人を待っている。ボスの教養と、王の氣どったしゃべり方が人々に奇異に思われ、彼らの“恐怖心”をよび起こす。「殺してしまえ！」と追いかけられ、2人は捕まって、「奴隷」として売りとばされるのだ。「王」が「奴隷」になるという人生最大の「ジョーク」である。

2人は競売にかけられ、「イギリス国王は7ドル」「ボスは9ドル」で売られる。(人生の「ジョーク」は続く。)
「王は12ドル、私だって15ドルの価値はあるのに。」(ユーモア)そしてボスは思う。「我々人間はバカなのだ。生れた時からそうなのだ」と。——人生の「不条理」に圧倒され、その“皮肉”を学んでいくさまは「ハック」視点である。

その他さまざまな場面を目撃しながら2人は他の奴隷たちと共に引かれていく。「魔女だ!」と追いかけて来た女が捕まり、目の前で焼き殺される。奴隷商人は「この火にあたって体を暖めろ」という(サディズム)。また貧しさのあまり「リネン布1枚」盗んだ母親が処刑台に立たされている。赤子を抱きしめて離そうとしない。(そうだと知らない赤子はくすぐったがって嬉しそうである。)
「私がいなくなったらこの子はどうなるのでしょうか。家もなく、父も母も友もないこの子は死んでしまう!」と女は絶叫する。観衆は誰も答えない。そのとき、そばに立っていた神父がやさしく声をかける。「その子にはみんなそろっているよ。私とそのすべてになって尽くしてあげる、私が死ぬまでね。」その時の母親の表情は言葉では表現できない——とボスはいう。ユゴーを思い起こさせるような筆致で描かれている。すべてイノセントな「ハック」視点である。

〔2〕 エンディング

さまざまな“不安”と“恐怖”そして“感動”をかきたてながらストーリーは王とボスの「脱出」へと向かう。

第36章から(第46章まで)を“エンディング”と筆者が呼ぶのには理由がある。『ハック』の“エンディング”と余りに似ているからである。

ストーリーを追ってみよう——

(王とボスは「奴隷」として商人に引きずられてロンドンに入っている)

ボスは町のあちこちに延びている「電線」を見て狂喜する。(ジョーク第1弾—6世紀イギリスが今や19世紀の様相を帯びている。ひどいストーリー展開である。)
「あの線さえあれば」と思う。ボスの「逃亡計画」は、電線で合鍵を

作ってそっと鎖を外す。主人をさんざん打ちのめして、服をとり換え、逆に主人に手錠をはめる。そして奴隷商人のような顔をしてキャメロットに連れていき、そこで……、というものであった。「すばらしい気絶せんばかりの劇的な一幕をキャメロットの宮殿で演じて、この冒険を終えるのだ」とボスは悦に浸っている。——読者は、ボスがもうイノセントな「ハック」視点を持っておらず、本来のあの“演出”好きの「トム」視点（Clown 視点）にもどっていることに気がつく。「モラル」ストーリーは終わったのだ。そして——

ボスの「計画」は失敗する。（「トム」の計画はいつも失敗する！）。夜のうちに主人を襲い、——そして“好奇心”の強い他の奴隷たちも応援してくれた（サディズム）のだが——相手を間違えたのだ！（ジョーク第2弾）騒ぎに驚いて駆けつけた夜警に捕まって留置場へ。

翌日、取り調べの役人が質問するので、ボスは思わず、「私はある伯爵さまの奴隷でご主人の容態が悪いので医者を呼びに来てたらこの騒ぎに巻きこまれたのです。私は御主人様のお生命が心配で……」と“思いつき”の釈明をする。（とっさの“嘘”は「トム」の得意とするところである。）すると役人は、問いただすどころか、突然、「失礼致しました。どうかお赦しを。……伯爵様にぜひよしたに」と詫びて（マゾヒズム）ボスを釈放するのである！ボスも驚いてしまう。（ジョーク第3弾）——“信じ易く”“権威に弱い”この時代ならではの展開であろうか？いや、トウェインの描く「社会」はいつもこうである。

王を捜すため、急いで奴隷小屋に戻ってみるが、もぬけのからである。人だかりがあって、何と主人が奴隷たちに殺されたあとなのだ。そして逃亡した奴隷は皆つかまったらしい。王もいっしょに牢屋にいるらしく、24時間以内に「死刑」だとのこと。ボスはそこを飛び出て「電信所」を探し当てる。そこの男を脅し、クラレンスに電信を打つ。（突然、「現代文明」が役に立つ——ジョーク第4弾）男が聞き耳をたてていたが、ボスはほくそえむ。「そんなことをしても無駄だった。私は暗号を使ったのだから。」（ジョーク第5弾）——この慌しい時に「トム」的な“演出”癖が出る。男を打ちのめして通信したらよいものを。こうやって「トム」はいつも“破局”に向かう。

電信の内容は、「500名ノ精銳ノ騎士ヲランスロットニ指揮サセテ送ラレタシ。大至急。南西ノ門ヨリ入レ。右腕ニ白キ布ヲ卷キツケタル男ヲ探スヨウ伝エラレタシ。」(傍点=筆者)——ボスは“英雄”気取りの華々しい“演出”を考えている。『アーサー王物語』では、ランスロット卿は兜に恋人がくれた「金の袖衣」をつけて馬上試合に出る「色男」であったが²²⁾、ボスは右腕に「白の布」をつけ、騎士たちを「指揮」しようというのである。そして「こうやって牢屋を取り囲み、たちまちに王を救い出す。こいつはどう考えたってすばらしく派手で目の覚めるような光景だ。本来なら真っ昼間にやりたいところだ。そしたらもっと劇的なのに」というとき、読者は同じく派手で手のこんだ、トムによるジムの「救出計画」(トムはジムを「モンテ・クリスト伯」扱いしなければ気がすまなかった)を思い出し、眉をしかめる。

次に服を着替えなければならない。(“演出”に差し支える。)ところが、服を購入するため町角を曲がったところで「咳」をして敵に見つかってしまう(ジョーク第6弾)。ボスはそばの店に飛びこんで、女主人に自分は「変装した治安役人」であそこにいる仲間と逃亡奴隷を捜している。あそこに行って、彼に路地のはずれで待ち伏せしてくれ、私が奴隷を狩り出すから、と伝言させる。女は使命感を感じて喜々として(マゾヒズム)飛び出して行く。ボスは裏口から抜け出し、鍵をかけて、「ひとり、くっくっという気分になった」という。——自分でシナリオを作って演じているサディスト、トム=ボスの姿に読者は啞然としている。

ところがこれもまた失敗する。思わぬ場所に敵が現われたのだ。捕まってボスは思う。「ふつう人間だから当然こうするだろうと思って裏をかいてみると、そうするのが当然でないようなことをやる人間がいるものだ。」(ジョーク第7弾)

引きたてられる道々、ボスは役人に「我々は誰も縛り首なんかにならないよ」と気の利いたことをいう。ランスロットたちを当てにして。「すぐ自由になるんだ。」すると役人は笑い飛ばして、ついでに、刑が明日から今日に「変更」になったことを教える(ジョーク第8弾)。ボスはぎょっとして気が滅入って

しまう。——とにかく、トウェインらしい「ジョーク」(第1—8弾まで示しておいた)の連続である。『ハック』のエンディングもそうであったが、こういった「ジョーク」展開の、サディステックなまでのしつこさは人生のもつ「不条理」(absurdity)を強く感じさせるのに十分である。

しかし、救援はやってくる。ランスロットの率いる500人の騎士たちが「自転車」に乗って！(ジョーク第9弾)——あり得ないような展開だが、ボスはアーサー王国を19世紀なみに改造してきたのだから、こういうのも許される。

ボスは「白い布」を右腕に巻きつけて振る。王のそばに立って、「土下座しろ、この不埒者めら、国王に敬礼いたせ！」と叫ぶ。そして「効果を頂点にまでもってゆけた」と思う(サディズム)。「今までの話を全部ふり返っても、今回のが一番はなやかなものになった」と満足する。——ああ、「トム」！

クラレンスがやってきて「現代英語」でしゃべる。「[この演出に]すごくびっくりしたでしょう？きっと気に入っていただけると思ったんです。ずっと訓練してしましてね。一度みんなをアッといわせてやりたいと、その機会をずっと待っていたんですよ。」——あどけなかった少年クラレンスが、いつしか「ハック」というより「トム」に成長してしまっている(ジョーク第10弾)。おそろしいことである。少年はボスの“教育”を受けて1人前の“目立ちたがりや”のサディストに成長したのだ。ストーリーの中で、ボス自身に続いてまた1人、「ハック」の可能性をもった者はいなくなったわけで、読者は嫌な空気を感じとる。ひどいブラック・ユーモアになっている。そして“破局”が近いことを知る。

「参謀」(=「首相」)の座に返り咲いたボスによる王国の本格的「改革」が始まる。まず「騎士制度」が廃止され、彼らはその放浪癖をボスに買われて、「営業マン」に転職させられる。(馬→自転車に次ぐひどいパーレスク。)学校、鉱山、工場、大学、出版活動と整備され、奴隷制も廃止される。「人は法のもとに平等(all men are equal before the law)」(『独立宣言』のパーレスク?)となる。電信、電話、蓄音機、タイプライター、ミシンその他の電気・蒸気の製品が現われ、テムズ川には蒸気船、そして軍艦も(サディズム)浮

かんでいる。そろそろ探検隊を出して「アメリカ大陸を発見させようか」と思う（ユーモア）。あとはカトリック「教会」を潰して、プロテスタント化し、「参政権」を確立するだけ。『共和国』の誕生である。「気恥ずかしいが、白状すれば私が共和国の初代大統領になりたい」とボスは思っている。——ボスの「トム」的性格は全く変わらない。読者は読み進むにつれ、彼の“啓蒙性”と共に度々顔を出す“偏執性”にただただ戸惑う。

クラレンスは『共和国』もいいが、「王室」は残しましょうという。ボスが「君主制は危険だ」というと、「それならネコの王室にしましょう。それでも結構まに合います。知能程度は同じだし、荒っぽい気質も合ってます。トム7世やトム15世なんて響きがいいじゃないですか」と答える。——読者はクラレンスが“皮肉”なユーモアを飛ばす、りっぱな「トム」に成長したことを改めて確信する。そして陰鬱になる。

悲劇が始まる。ランスロット卿をよからず思っていた連中が彼と王妃の「関係」をアーサー王に訴えたのだ。王国は真っ二つに分かれて戦争になる。多くの騎士が死ぬ。——この辺は「伝説」の通りである。トウェインはやっともとの『アーサー王物語』にもどってきた。

しかし、ボスとクラレンスの“ふざけ”は止まらない。騎士たちが次々に死んだことをきいて、ボスは（騎士たちで編成してあった「野球チーム」のことを思い出して）「ああ、いいシュートを失った。いいライトも失った……」とつぶやき、クラレンスは「生徒のひとりが“現場写真”を撮りましたよ。題して『ランスロットの反逆』」などと報告する。

そして家督争いもあってアーサー王は戦死する。クラレンスはボスに得意げにいう。「その模様は全部、新聞にしました。見て下さい。『従軍記事 (War Correspondence)』ですよ。次第に人気が出てきました。」——クラレンスは着実に育っている。ボスは「これは立派な記事だ。お前も一流の編集長になったな」とほめる。「トム」と「トム」との会話である。やはり「ハック」はいなくなった……。

2人にとって最大の戦いが始まる。「ローマ教会」が『破門令 (Interdict)』

を出したというのだ。イギリス王国の乱れにローマが口出ししてきた。覇権を伸ばしてきたのだ(サディズム)。その対象にはボスも含まれ、今や国中の騎士たちがボスを殺すべく狙っている。ボスは驚く。「私が育てた部下はどうした。学校にも、工場にも……。」クラレンスは平然として、「皆、寝返りましたよ。あなたは教育によってあの連中から迷信を取り除けると思っていたのですか」とボスを説教する。——「教会」がそのサディスト的本性を現わし、そのもとでの民衆のマゾヒスト的反応が描かれている。そしてあのサディスト・シャバン大佐と同じように、ボスを説教するクラレンスの姿に、読者は何か恐ろしいものを感じる。クラレンスはボスを超えた？

クラレンスはいう。「でも安心して下さい。各工場から優秀な少年をひとりずつ——“迷信”に対しては少年しか信用できません——選んで部隊を作っておきました。52人の屈強な『少年部隊』です。どんな苦境のもとでも誠実であると保証できる少年たちです。」ボスは大喜びする。——読者はトムが結成した「トム・ソーヤー・ギャング団」を思い出す。トムは少年たちに「血判」でもって忠誠を誓わせていた。結局『ヤンキー』はもとの『トム・ソーヤーの冒険』にもどってきた。そしてその主人公はトム＝ボスとトム＝クラレンスである。

クラレンスがしておいた「準備」(高電圧鉄条網、機関銃、地雷——「実験は終わってます。降伏を要求してきた『教会』の使いたちが間違っ飛んで吹っ飛びました。)(サディズム))に従い、ボスは臨戦体制に入る。まず『宣言書』を發布する。(「血判状」に代わるものである。「トム」はいつも“儀式”にこだわるようである。)そして『サンドベルトの戦い』——命名はもちろんボス——が始まる。大量殺りくである。騎士たちが鉄条網で黒こげになり、機関銃で撃ちまくられ、地雷で吹っ飛ぶ。(よく考えるとひどいサディズムである。こちらは近代兵器で武装しているが、敵は槍と剣だけの殆ど素手なのだ！)

「死者の数など数えることはできなかった。まともな形で残っているものなどひとつもなく、ただ原形質が鉄やボタンといっしょに落ちてくるばかり。」(サディズム)ボスは『勝利宣言』を発表する。「歴史に残るであろう『サンドベルト』のこの快拳。宇宙ある限り、語り継がれ……。」ボスは自らの「名調

子」と続いておこる「拍手喝采」(マゾヒズム)にうっとりする(サディズム)。そこで更に“演説”する。「騎士がいる限り、戦争は終わらない。騎士を皆殺しにするまで戦おうではないか。」大きないつまでもなりやまぬ「拍手」(マゾヒズム)に満足する(サディズム)。——いったい、物語のこの浮わつた調子は何なのだと読者は思う。トウェインのこの“ふざけた”作品の目的は何だったのか。(Hemingway は『ハック・フィン』以上にこの作品を赦さないだろう。)トウェインの意図するところは、“歴史”の“バーレスク”でもなく、19世紀的“ユートピア思想”の紹介でもなく、人間が普遍的にもついやらしい“サド・マゾヒズム”の暴露にあったのだ。

その後、「水攻め」も行なわれ、25000の敵は52人+2人の「少年部隊」に敗れ去る。そして最後にひどい「ジョーク」が待っている。まず膨大な数の死体に囲まれて、その死体が出す有毒ガスに当てられた少年たちがひとりひとりと倒れていく。次にはボスにずっと恨みを持っていた魔術師が「女装」をして現われ、手伝うふりをして、ボスに「催眠術」をかけるのだ。それも「1300年は目が覚めない」術を。——あっけないボスと少年たちの“敗北”は改めて人生の「不条理」を見せつける。

さて、この後「タイムマシン」的展開へと続くわけだが、今まで述べてきたこの長いエンディングのテクニクとその意味について再度確認しておきたい。『ハック・フィン』の時もそうであったが、トウェインは中間部の Innocent (「ハック」) 視点を Clown (「トム」) 視点が圧倒する(あるいは、襲う)ような形でストーリーを変えてしまうのを好むようである。これは前回論文で述べたように、「フレーム」パターンの応用であり、「フレーム」においては、話題に「モラル」性がある場合、さりげない(「フレーム」的)“視点”変更は、サディズム効果を生みブラック・ユーモアを作り出すことが可能であった。視点を Clown (=outlaw) にするということは必然的にそれまでの Innocent (=「モラル」的) 視点を否定することになり、そこにはサディズムが生まれるのである。

『ヤンキー』の長いエンディング——さまざまな「ジョーク」を使って主人

公の Clown 性を読者に定着させてゆく——もそういう意図をもっているようである。10章50頁にわたる idiotic な展開により、読者は印象深く人生に潜むサド・マゾヒズムの実態を知るのだ。

「あとがき」は改めて明瞭な「フレーム」(Gentleman 視点)になっている。ボスは「タイムマシン」的に19世紀に戻り、正気に戻っている！——この最後のふざけた「ジョーク」展開は「フレーム」の detached な役目を十二分に果たしている。数百頁の真面目(でもない?)な物語を一度に“茶化”してしまふ迫力がある。時間軸が空間軸をあざ笑うような——人生の「不条理」が人間をあざ笑うような。

トウェイン(「私」)は原稿を読み終り、いつしか隣で delirium に陥っているこの「妙な男」を見ている。男は夢の中でいろいろなことを思い出して、センチメンタルになった後、急に「ラッパだ。国王陛下だ！はね橋を降ろせ、そうだ……！」と騒ぎ立て、息が絶える。「また何か体裁(effect)ぶろうとしていたけれどどうまくいかなかったようだ」というトウェインはよそよそしい。——何かしら真剣に読んできた者が馬鹿をみたような終わり方である。Gentleman 「フレーム」に突き放された。

〈その3〉 2重の「フレーム」——まとめに代えて——

『ヤンキー』のストーリーは、大きくは、「フレーム」(「解説」)の Gentleman 視点→モーガン(後にボス)の Clown 視点→「フレーム」(「あとがき」)の Gentleman 視点、というふうに“視点”移動が起こる作品である。これは Lynn のいう「トウェイン作品中、最も南部ユーモア的なもの」²³⁾ということになる。Lynn はトウェインが次第に「フレーム」を無くして遂には「イノセント視点」を見出し、(H. ジェイムズより先に)アメリカで最初の「国際性ある文学」²⁴⁾を創った、と持論を展開するのであったが、改めてトウェインの Gentleman 視点への“執着”を認めざるを得なくなる。

そうなると、殆どありとあらゆる批評家が「失敗だ」「ふざけた」「名品の中のキズだ」と批難する『ハック・フィン』のエンディングにも別の解釈があっ

てもよいのではないだろうか。——そう、「フレーム」的解釈である。

『ヤンキー』についても同じ問題が起きているようである。まず作品の大きな外枠「フレーム」(「解説」及び「あとがき」)についていえば、Lynn は当然のことながら、Smith が「奇妙なフレームだ」²⁵⁾といい、Cox は「創造力上の傷害 (lesion) がもたらした」²⁶⁾と冷たい。筆者はそれに対し、〈その1〉においてトウェインがいかに“形式的”に見える「フレーム」に“執着”し、そしてそこに、トウェインが狙ったと思われる、どのような“意外な効果”が表れるかを示しておいた。〈その2〉の『ヤンキー』分析においてもその“効果”は確認されたはずである。

次に外枠「フレーム」に狭まれた中のストーリーであるが、中間あたり(第27—36章)で少し様子が違ってくことを述べておいた。すなわち、それまで煽動的であった(Clown 視点)ボスが後ろに引いて“観察的”になり、王やその他の人々の「威厳」「葛籐」「モラル変動」を見て“圧倒”される。さらにボス自身、“感動”し、真面目に人生を“考える”ことになる。これはまるで「ハック」であり、イノセント視点である。(もちろん、それ以前にも“イノセント性”は見えていたがすぐ覆い隠された。)そしてその後、またもとのボス視点(Clown 視点)にもどってエンディングに入るのである。このパターン(Clown→Innocent→Clown 的“視点”変化)は独特の“よそよそしい”効果を産んでまさに「フレーム」的であることは『ハック』の場合と同じである。(“ふざけ”のエンディングはトウェインが「フレーム」効果を利用したのである!)そしてエンディングの極めつけとして先程の外枠「フレーム」が来て、更に“よそよそしく”ストーリーを終わらせる。前者を「内的(意味的)フレーム」、後者を「外的(形式的)フレーム」といえようか。この“2重フレーム”で“効果”は倍加していると思われる。

これらの激しい“視点”変化は一般に評価されていないようである。Smith に代表していわせれば、「主人公のモーガンの性格描写に一貫性がなく (inconsistent)」²⁷⁾、「まぎらわしい (so disturbing)」²⁸⁾となる。『ハック』の「シャーパーン大佐・エピソード」を嫌い、エンディングを嫌った Smith らしい発言

である。彼は『ヤンキー』を「失敗」とみる。

Cox は『ハック』のエンディングを「これしかない」とほめたのに、今回の作品は “an extravagant failure”²⁹⁾ であり, “tiresome”³⁰⁾ だと決めつける。

「あちこちのパーレスクは面白いが、モーガンが権力をとった途端、ふざけ (fantasy) が批判 (criticism) を負かしてしまい、ストーリーの進展が単なる成り行き (sequence) になってしまう」³¹⁾ というのである。彼はストーリー中において、他人 (王その他) による「葛籐」を本人 (ボス) のものとは見れないのである。あの“感動的”場面におけるボスの“同苦”を認めないのである。従って「ストーリー性」 (“confrontations and discoveries”)³²⁾ が弱く、『ハック』の場合の horseplay ending は「必然的」だと認めたのに今回は単にボスの「1人よがり」のエンディングである、という。もし、「葛籐」をボスが“共有”したと認めれば、この作品は『ハック』と同じパターンであり、ただ主人公の性格が「ハック」より「トム」の色彩を強く持っているだけ——そしてそれだけ sardonic で realistic (“理想主義的” に対し) ——といえるのだ。

そして Cox はこの作品を「単なる Tom Sawyer Fantasyだ」と批難するのであるが、これは鋭い指摘でもある。『ヤンキー』を一般に『ハック』の続きとみがちなか中、これは『トム・ソーヤー』もの (“Tom Sawyer grown up”) だとはっきりいうのは彼なのである。そして筆者もはからずも同じ目で見えてきた。モーガンとハックでは性格が (部分的に似通っても) 違いすぎて、話がつながらないのである。

『ヤンキー』をほめ上げるのは Howells と L. Budd である。Howells は20年後にまたまた読み返し (“re-re-read”), 「今まで読んだ中で最も楽しい、真に迫った、人間的で素晴らしい作品」³³⁾ と感想を述べる。その理由は ideology 的なものようである。Budd の方は、「批評家は作品を〔態度ではなく〕芸術性から見るべきである。内容が confused だからといって無視してはならない」[『ヤンキー』は] ストーリーの曲線は even でないが、それは波の頭が高いから底が低くなるのだ……。よく出きた作品 (with success) である」³⁴⁾ と冷静である。

筆者は今までこの作品を分析してきたように、『ヤンキー』はとても優れた作品だと思う。トウェインの一貫した思想性（〈その1〉の〔2〕で示した）が出ているし、「フレーム」効果についても、トウェインの永年にわたる“意図”を感じる。人生の「不条理」を表わすためにはうってつけの方法だと思う。また、“視点”変化の激しさについていえば、むしろ（ここではモーガンの、だが）人間の内面の inconsistency を表わしているからこそ面白いのである。人間はいずれ“モラル問題”で悩むものであろうし、その悩むパターンもいろいろである。人間を単に「ハック」型と「トム」型に分けてしまうのは無理がある。どちらかに比重がありながら、2つとも1人の人間に同居していると思われるのだ。

モーガンの場合、「トム」の比重が大きくて、「トム」→「ハック」→「トム」という変化を起こしたわけである。そして結局は“ふざけ屋”の「トム」にもどってくる（エンディング）というのがこのストーリーのブラック・ユーモアである。（『ハック』も同じパターンであった。）

そして世の中にこの「トム」パターンの人間が多いということ（中には「ハック」を経ないで「トム」になるのもいる。クラレンスはあっという間に「トム」に成長してしまった）、そういう人間が構成する社会はサディスティックで、また人生自体「不条理」なものである、というのがトウェインの変わらぬメッセージであり警告であろう。

注

- 1) Lynn, Kenneth: *Mark Twain and Southwestern Humor* (Greenwood Press Publishers, Westport, Conn., 1975).
- 2) *Ibid.*, p. 243.
- 3) 拙論「マーク・トウェインのエンディング効果(1)」(創価大学英文学会『英語英文学』Vol. 10, No. 2) 参照。
- 4) Smith, H. N.: *Mark Twain, the Development of a Writer* (The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1962), pp. 134-137.
- 5) 前掲論文参照。
- 6) *The Jumping Frog, Abeldard and Heloise, Dick Baker's Cat, Experience of*

McWilliamses with Membraneous Croup, The Siamese Twins, Blue-Jays, The Coyote, Col. Sellers at Home, Cannibalism in the Cars がそうである。

- 7) Twain, Mark: *A Ghost Story* (1888) がそうである。
- 8) Twain, Mark: *What Is Man?* (The Iowa Center for Textual Studies, University of California Press, Berkeley, L. A., London, 1973), pp. 56-59.
このタイトルは原本のものがはっきりしないので, Iowa Center が付けた。
- 9) *Ibid.*, pp. 60-64.
- 10) Twain, Mark: *Plymouth Rock & the Pilgrims*, ed. by C. Neider (Harper & Row, Publishers, N. Y., 1984).
- 11) Twain, Mark: *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (A Norton Critical Edition, W. W. Norton & Company, N. Y., London, 1982), p. 328.
- 12) *Ibid.*, p. 328.
- 13) *Ibid.*, pp. 346-364.
- 14) T. マロリー『アーサー王の死』(W. キャストン編, 厨川文夫, 厨川圭子訳) (筑摩書房, 1986年) に詳しい。
- 15) Twain, Mark: *A Connecticut Yankee*, *op. cit.*, pp. 336-339.
- 16) *Ibid.*, p. 324.
- 17) *Ibid.*, p. 332.
- 18) *Ibid.*, pp. 370-383.
- 19) Twain, Mark: *A Connecticut Yankee*, *op. cit.*, 以下, 引用文の訳は大久保博訳 (角川文庫, 1980年) を参考にした。
- 20) H. G. Wells: *Time Machine* (1888-1895) あるいは Bellamy: *Looking Backward* (1888) の影響とする批評家がほとんどであるが, Baetzhold がいうように Twain の構想は1884年の *Notebooks* に既に出ている。したがってこの発想は Twain が世界最初と筆者は見る。
- 21) Smith, H. N.: *op. cit.*, p. 413.
- 22) 前掲書『アーサー王の死』に詳しい。
- 23) Lynn: *op. cit.*, p. 252.
- 24) *Ibid.*, p. 156.
- 25) Smith H. N.: *op. cit.*, p. 138.
- 26) Cox, James M.: *Mark Twain, The Fate of Humor* (Princeton, New Jersey, Princeton University Press, 1976), p. 211.
- 27) Smith, H. N.: *op. cit.*, p. 138.
- 28) *Ibid.*, p. 168.
- 29) Cox: *op. cit.*, p. 198.

- 30) *Ibid.*, p. 221.
- 31) Twain Mark: *A Connecticut Yankee, op. cit.*, p. 392.
- 32) Cox: *op. cit.*, p. 219.
- 33) Smith, H. N.: *op. cit.*, p. 169.
- 34) Twain, Mark: *A Connecticut Yankee, op. cit.*, p. 408.